

ハイスラ語における再帰・相互表現について

ワットゥクンプ テロ

(Tero Vattukumpu)

京都大学大学院文学研究科・terova@gmail.com

キーワード：ハイスラ語、再帰、相互、再帰代名詞、複数形

1 はじめに

本稿では、ハイスラ語 (Haisla) のフィールド調査で集めたデータの中に出ている再帰 (reflexive) 表現と相互 (reciprocal) 表現とそれらについての今までの考察・現段階の分析の過程について論じる。後述のように、ハイスラ語では、再帰性・相互性を表すために様々な手段が用いられるが、筆者のフィールド調査によって、先行研究では記述されていない再帰・相互表現が存在することが分かった。本稿では、こうした再帰・相互表現を提示したうえで、これらを体系的に記述するうえで、どのような問題があるかを指摘する。

本稿の具体的な内容は以下の通りである。まず、第1章の残りの部分でハイスラ語の概要を説明する。第2章では、本稿のテーマの背景と本稿で扱うデータ及び再帰性と相互性の定義について述べる。第3章では、先行研究で記述されている (ハイスラ語の) 再帰・相互表現についてまとめる。第4章では、新たな筆者が発見した再帰・相互表現を紹介する。第5章では、再帰・相互表現を記述するうえでの問題点をまとめる。第6章では、結論として今後の課題について述べる。

1.1 ハイスラ語について

ハイスラ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州でハイスラ族という先住民に話されている危機言語であり、ワカシュ語族の北ワカシュ語派に属している。2018年8月の時点で、ハイスラ語の話者数は、87人であった¹。話者は全員ハイスラ語と英語のバイリンガルで、ほとんどブリティッシュ・コロンビア州の中央部に所在しているキタマート村 (Kitamaat Village) に在住している (地図1)。

ハイスラ語は、基本語順が述語—主語—目的語であり、音韻論的・形態論的な体系が複雑で、複統合的な言語であると記述されたことがある (Bach 1995: 13)。

本稿の内容にとって知っておくべき特徴としては更に、次の文法現象も紹介する：

¹ この情報は、2018年8月に Haisla Nation Council のコミュニティ文化コーディネーターの Teresa Windsor 様から得ている。

1) 主語と直接目的語は、節の中で名詞句によって表されなければ、述語には主語と直接目的語の人称を表す人称接語が付く。2) ハイスラ語の述語は、助動詞と本動詞からなる複述語及び本動詞のみの単述語という 2 種類がある。3) 複述語の場合に、主語人称接語は助動詞に付き、直接目的語人称接語は本動詞に付く。単述語の場合に、主語人称接語と直接目的語人称接語の両方が本動詞に付く。4) 複数形を形成する手段として、部分重複 (partial reduplication) は生産性が高い



地図 1 : キタマート村の所在地

(Vink 1978: 1, Bach 1990a: 2)。5) ハイスラ語の一人称複数数は、除外的一人称複数と包括的一人称複数があり、人称接語の単複の区別があるのは、一人称だけである。6) 単述語の場合に、主語が複数ならば、述語は複数形になり、複述語の場合に、主語が複数ならば、助動詞は複数形になり、直接目的語が複数ならば、本動詞が複数形になる。ただし、主語又は直接目的語が一人称複数の場合に、複数形は任意的である。7) 人称代名詞は人称接語と共起することがなく、人称代名詞を使った表現はあまり一般的ではない。ハイスラ語の音韻体系や人称接語及び本稿で採用されている表記法については、最後に付属参照資料を添付している。

2 本稿のテーマの背景とデータについて

ハイスラ語の記述文法を作成する目的でハイスラ語のデータを集めるため、2017 年から 2018 年にかけて 2 回の調査で、ハイスラ語の述語の屈折パラダイムとして人称接語の全ての組み合わせを集めようとしてきた。その作業のついでに、二次的なデータとして再帰・相互表現についても調査してきたが、集まった再帰・相互表現のデータはまだそこまで多くない。現段階では、集められた再帰・相互表現のデータをひとまず整理しており、今後の分析や調査の方向性を考えているところである。

本稿で示すデータは全部、2017 年から 2018 年にかけての 2 回の調査で集めたものである。調査期間は以下の通りである：

表 1 : 調査期間

2017 年の調査	2018 年の調査
9 月 1 日 ~ 10 月 31 日	6 月 27 日 ~ 8 月 31 日

これまでのデータは、2 人のコンサルタントから得たものであり、本稿ではコンサルタント A とコンサルタント B と呼ぶことにする。コンサルタントの基本情報は以下に示す：

表 2 : コンサルタントの基本情報

コンサルタント	性別	生年	出身地	調査協力年
A	女	1950 年	キタマート村	2017・2018 年
B	男	1946 年	キタマート村	2018 年

両方のコンサルタントはハイスラ語を第一言語 (の 1 つとして) 習得した方である。筆者が集めた再帰・相互表現の全てのデータは、聞き出し (elicitation) によって集まった。主な聞き方は、1 つの意味に対して筆者が考えた表現の許容性についてコンサルタントに質問することであった。

2.1 再帰性・相互性の定義と本稿のデータ

本稿のデータは、再帰性(reflexivity)・相互性(reciprocity)という概念の明確な定義に基づいて体系的に集められたデータではなく、本稿で紹介した考察は初期段階の整理のようなもので、まだそこまで理論的にはまだ分析していない。筆者がこれまでに集めた再帰・相互表現のデータと再帰性・相互性の定義の関係について何が言えるのかをしっかりと把握する目的で、筆者が採用したいと考える再帰・相互の定義について紹介し、どの種類のデータが集まっているかについて述べる。

最も基本的な定義のようであると考えられる再帰性・相互性の定義の 1 つは König & Gast (2008: 7) が挙げている以下の述語論理 (predicate logic) に基づいた形式的な定義である :

【再帰性の定義】

A binary predicate R is reflexive on a set A iff:

$$\forall x \in A [R(x,x)] \quad (\text{König \& Gast 2008: 7})$$

【相互性の定義】

A binary predicate R is reciprocal on a set A iff:

$$\forall x,y \in A [x \neq y \rightarrow R(x,y)] \text{ and } |A| \geq 2 \text{ ("strong reciprocity")} \quad (\text{König \& Gast 2008: 7})$$

König & Gast (2008: 7) が挙げている相互性の定義は "strong reciprocity" という相互性の種類に当たる。ところが、相互性にはいくつかの種類がある。例えば、Dalrymple, Kanazawa, Mchombo & Peters (1994: 65-69) は、様々な相互性の種類をまとめている。詳細は深入りしないが、これらの種類の意味の違いはハイスラ語の相互表現において何らかの形で反映されているかどうかは不明である。また、本稿で扱うデータにおいても、相互性の種類の違いが反映されているかどうかは分からない。なぜならば、コンサルタントは、どのような場面 (相互性のどの種類) を想像しながら、これまでに調査で集まった相互表現の例を発言したかは分からないからである。

また、相互性という概念の種類分け以外に、Nedjalkov (2007) は、相互表現の多機能性・多義性について指摘している。Nadjalkov (2007) は相互表現の多機能性・多義性の例として、結合価を減らす機能（中間態 (middle voice)・非他動詞化) (Nedjalkov 2007: 13) 及び、再帰性・相互性と随伴性 (sociativity)・相互性と反復性 (iterativity)・相互性の多義性などを挙げている (Nedjalkov 2007: 17)²。本稿で紹介するデータは、ハイアラ語において (先行研究で再帰代名詞として扱われてきた形態素を用いた場合に) 再帰性・相互性の多義性が生じることがあることを示唆しているものの、その他の多義性の可能性については現段階では何も言えない。なぜならば、本稿におけるデータは多義性の可能性を配慮した上で採取されたわけではないからである。

再帰性の概念に関して言えば、König & Gast (2008: 7-8) は、再帰代名詞にはよく強意詞 (intensifier) としての機能もあり、代名詞以外の再帰標識にはよく中間態を表す機能があると指摘している。このような多機能性・多義性はハイアラ語の再帰表現に見られるかどうかとも本稿のデータでは確定できない。

3 先行研究におけるハイアラ語再帰・相互表現の記述について

これまでのところ、ハイアラ語の再帰・相互表現の体系的な記述はされていないが、文法概略や辞書を見る限りでは、以下のような表現（再帰・相互接尾辞と再帰代名詞）が再帰・相互表現として機能していると考えられる。

Bach (2001b: 168) の辞書では、'self' という意味で *sax̄wla* と *bekwái* という再帰代名詞に見える見出し語が挙げられている。Bach (1990b: 197, 223) も同じ *sax̄wla* と *bekwái* を挙げているが、*bekwái* には 'self' 以外に 'body' という意味も与えている。また、Raley (n.d.) の辞書にも、'himself' という意味で、*sa-houtla* と *bukwag-assie* という見出し語がある。Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書には、Bach (2001b: 168) の *sax̄wla* と Raley (n.d.) の *sa-houtla* に相当するものは見当たらないが、'one's body' という意味で、Bach (2001b: 168) と同じ *bekwái* が見つかる (Lincoln & Rath 1986a: 54)。さらに、Bach (2001b: 168) によれば、*sísax̄wla* という複数形の再帰代名詞もある。Bach (1990b: 119, 124) は、'self' という意味で *-saq̄w*³ という接尾辞の存在を指摘しているが、具体例は挙げていない⁴。

相互表現に関しては、Vink (1977: 130) と Bach (1990b: 118, 123) は、'each other' という意味の *-ap'* という接尾辞を挙げている。また、Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書では、Bach

² Nedjalkov (2007: 17) によれば、この3つは、相互表現において最もよくある多義性のパターンである。

³ ハイアラ語には、基底形の有気軟口蓋破裂音と有気口蓋垂破裂音が子音の前と語末の位置で同器官的な摩擦音として発音されるという音韻交替の現象があるので、*-saq̄w* の実際の発音が /sax̄w/ ((sax̄w)) のはずである。Bach (2001b: 168) が挙げている *sax̄wla* と関係があるだろうと考えられるが、現時点でこのことに関してはこれ以上のことが言えない。

⁴ Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書でも、確実に *-saq̄w* を含んでいると考えられる見出し語が見当たらない。

(1990b: 117, 121; 2001a: 56) が ‘together’ という意味で挙げている *-(g)u* という接尾辞が付いている見出し語がよく、‘to X each other’ と訳されている⁵。

4 データの中の再帰・相互表現

筆者の調査では、再帰代名詞の単数形 *sax̄ʷla* と複数形 *sísax̄ʷla*、あるいはこれらの異形態と思しき *sax̄ʷ* と *sísax̄ʷ* の使用を確認することはできた。しかしながら、相互接尾辞 *-ap'* はほとんどみられず、再帰接尾辞 *-saq̄ʷ* を用いた例は一例もみられなかった。また、同じ人稱を表す形態素を2つ用いることにより、再帰表現が形成され、再帰代名詞の複数形を用いることにより、相互表現が形成されるパターンも確認された。

【人稱繰り返しパターン (person repetition pattern)】

同じ人稱を表す形態素が2つ出てくることによって **再帰表現** となるパターンである。以下の3種類があった：

1. 【単述語・人稱接語パターン (simple predicate – person clitic pattern)】：

述語に同一人稱の主語人稱接語と直接目的語人稱接語が現れる。

2. 【複述語・人稱接語パターン (complex predicate – person clitic pattern)】：

複述語の1つの要素には主語人稱接語が現れ、もう1つの要素には同一人稱の直接目的語人稱接語が現れる。

3. 【人稱代名詞・人稱接語パターン (personal pronoun – person clitic pattern)】：

主語として人稱代名詞が現れ、述語に同一人稱の直接目的語人稱接語が現れる。

【再帰代名詞パターン (reflexive pronoun pattern)】

述語には主語人稱接語のみが付いた上で、直接目的語の位置に再帰代名詞の *sax̄ʷ* と *sísax̄ʷ* のどちらかが現れ、**再帰又は相互表現** となる。

この2つのパターンの中、「再帰代名詞パターン」による相互表現的な用法と「人稱繰り返しパターン」は管見の限りでは先行研究でまだ記述されていない。全パターンの全ての例を次節で詳しく見ていく。

4.1 人稱繰り返しパターンによる再帰表現

人稱繰り返しのパターンの例は全部コンサルタント A から得られた例である。まずは、人稱繰り返しパターンの単述語・人稱接語パターンの例を見ていく。最初に、主語が単数の3つの例を以下に示す。

⁵ 例えば、Lincoln & Rath (1986b: 305) は、*q̄aq̄aḡu* という見出し語を挙げ、‘to meet face to face / to be in tune with each other’ という意味を与えている。この語で *-(g)u* ‘together’ は、重複によって *-q̄a* ‘straight, in the middle, correct / to find, to discover, to learn / to be situated’ という語根から形成された *q̄aq̄a-* という語幹に付いている (Lincoln & Rath 1986b: 305, 480)。

- (1) 'elxásá=nug^w=enλa
kill=1SG.EXCL.SBJ=1SG.EXCL.OBJ
'I killed myself.' (lit. 'I killed me.')
- (2) 'elxásá=su='uλa⁶
kill=2.SBJ=2.OBJ
'You killed yourself.' (lit. 'You (SG) killed you (SG).')
- (3) 'elxá=su='uλ(a)
beat.up=2.SBJ=2.OBJ
'You beat yourself up.' (lit. 'You (SG) beat you (SG) up.')

(1) ~ (3) の例で分かるように、'殺す'という意味の語幹 (stem) である 'elxásá- は、'elxá- ('打ちのめす') と -sa という接尾辞からなっていると考えられる。そうであるとしても、-sa は何の接尾辞かは不明である⁷。単述語・人称接語パターンの残りの主語が複数の 2 例は多少問題な例なのであるが、以下に示す。

- (4) 'i-'elxásá=nug^w=entλanux^w
PRED.PL-kill=1SG.EXCL.SBJ=1PL.EXCL.OBJ
'We (EXCL) killed ourselves.' [sic]
(lit. 'I killed us (EXCL).')
- (5) 'i-'elxásá=nug^w=entλanis
PRED.PL-kill=1SG.EXCL.SBJ=1PL.INCL.OBJ
'We (INCL) killed ourselves.' [sic]
(lit. 'I killed us (INCL).')

(4) と (5) の例はそれぞれ、除外的一人称と包括的一人称の再帰表現を意味しているとコンサルタント A が指摘した。これらの例に関しては、注目すべき点が 2 つある：1) 主語と直接目的語の人称接語は同一人称ではない。2) 述語の語幹 (stem) として出ているのは部分重複によってできた複数形 ('i'elxásá-) である。ハイスラ語の動詞に語幹に部分重複がおきる。部分重複によってできた形式は、単述語の主語あるいは複述語の主語か目的語が複数の場合に

⁶ 理由は今の所不明であるが、(2) と (3) の例文では、主語接語と目的語接語の間に声門閉鎖音が出現している。それに伴って後ろの /u/ が二重母音化している ([ou])。(母音音素の異音については附属資料が参照になる。)

⁷ 筆者の推測では、語彙的アスペクト (lexical aspect, aktionsart) を変える接尾辞で、語根が表す動作を限界的 (telic) にするのである可能性がある。

現れる。このことを踏まえて、本稿では部分重複によって形成された動詞語幹を複数形と呼ぶ。筆者がこれまでに集めた全てのデータからすれば、述語に主語人称接語が付いている場合に述語の複数形は必ず主語の複数性を表すので、本来なら一人称単数の主語人称接語と述語の複数形が共起することはありません。 (4)の例に関しては確認が取れていないが、コンサルタント A は、(5)に関して、単数形の *'elxasá-* を使うと「私達(INCL)が自分達を」という再帰的な意味にはならないと指摘した。また、単数形の *'elxasá=nug^w=entlanux^w* と *'elxasá=nug^w=entlanis* という例が別にあり、それぞれ「私が私達(EXCL)を殺した」・「私が私達(INCL)を殺した」という意味となる。(4)・(5)の例の主語は、一人称複数であると解釈されるにもかかわらず、動詞語幹が一人称単数の主語人称接語でマークされている。また、部分重複によって形成される単述語の複数形は主語が複数の場合に現れるが、この2つの例では、人称接語と語幹の間に数の矛盾が生じている。

次に複述語・人称接語パターンの例を以下に示す。

- (6) *ǰʷiláka=su* *'elxas=úλ*
 AUX.do.on.one's.own=2.SBJ kill=2.OBJ
 'You killed yourself'
 (lit. 'You (SG) killed you (SG) on your own.')
- (7) *ǰʷiláka=su* *'i'-elxas=úλa*
 AUX.do.on.one's.own=2.SBJ PRED.PL-kill=2.OBJ
 'You killed yourselves.'
 (lit. 'You (PL) killed you (PL) on your own.')
- (8) *ǰʷiláka=n* *'elxas=énλ*
 AUX.do.on.one's.own=1.SG.EXCL.SBJ kill=1.SG.EXCL.OBJ
 'I killed myself.' (lit. 'I killed me on my own.')
- (9) *ǰʷiláka=su* *'elx=úλ*
 AUX.do.on.one's.own=2.SBJ beat.up=2.OBJ
 'You beat yourself up.' (lit. 'You (SG) beat you (SG) up on your own.')

上の (6) ~ (9) の例では、述語が *ǰʷiláka* (‘自分一人で・~達自身です’) という助動詞とその後の本動詞からなっていると考えられる。筆者のデータの中には、他に *ǰʷiláka* の例がないが、Bach (2001b: 49) は、*ǰʷiláka* に ‘do on your own’ という意味を与えている。*ǰʷiláka* は、助動詞としての用法があるという記述は先行研究で見えないが、ハイスラ語における典型的な助動詞と同様に振る舞っているので、助動詞 (AUX) だと分析している。

次に人称代名詞・人称接語パターンを見る。

- (10) yeḫsú 'elḫas=úḷa
 PN.2 kill=2.OBJ
 'You killed yourself.'
 (lit. 'You (SG) killed you (SG).')
- (11) yí-yeḫsu ('i-)'elḫas=úḷa
 PRED.PL-PN.2 (PRED.PL-)kill=2.OBJ
 'You killed yourselves.'
 (lit. 'You (PL) killed you (PL).')

ハイヌ語の基本語順で述語が文頭に来るのが一般的であるものの、これまでに集めたデータの中で人称代名詞が主語を表すものとして出てきた例文では、人称代名詞がなぜか文頭の位置に来ている。この現象はまだ説明できていないので、深入りはしない。また、コンサルタント A は、(10) の例に関して、述語の語幹として複数形を使った場合 (yeḫsú 'i'elḫasúḷa)、再帰的な意味になれないと指摘したが、相互的な意味で使えるかどうかは不明である。

人称繰り返しパターンによる再帰表現の文法性についてはコンサルタント B からほとんど確認得られていないが、(1) の例 ('elḫasá=nug^w=enḷa '私は自殺した') については、非文法的であると言われた。

次節では、再帰代名詞パターンの例を見ていく。

4.2 再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現

再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現の例は全て、コンサルタント B から得られたものである。単述語の例も複述語の例もある。最初には、単述語の例を見て、その後複述語の例を見ていく。まずは、主語が単数である単述語の例を示す。

- (12) gu'áḷa=n saḫ^wḷ
 help=1.SG.EXCL.SBJ PN.REFL
 'I am helping myself.'
- (13) gu'áḷ=u saḫ^wḷ
 help=3.MED.SBJ PN.REFL
 '(S)he (MED) is helping him/herself.'
- (14) gu'áḷ=i saḫ^wḷ
 help=3.DIS.SBJ PN.REFL
 '(S)he (DIS) is helping him/herself.'

- (15) dáka-λ-e=n saḿʷλ
 touch-FUT-EP=1.SG.EXCL.SBJ PN.REFL
 'I will touch myself.'

主語が単数の場合に、再帰代名詞は単数形 (*saḿʷλ*) のままでしか出現せず、文全体が再帰表現にしかない。次に、主語が複数の例を見ていく。まずは、一番に体系的にデータが取れている三人称の例 (16 と 17) を以下に示す。

- (16) a. gí-gu'aλ=u saḿʷλ / gu'aλ=u sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help=3.MED.SBJ PN.REFL / help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (MED) are helping themselves.'

- b. gí-gu'aλ=i saḿʷλ / gu'aλ=i sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help=3.DIS.SBJ PN.REFL / help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (DIS) are helping themselves.'

- c. gí-gu'aλa-λ=gi saḿʷλ / gu'aλa-λ=gi sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help-FUT=3.ABST.SBJ PN.REFL / help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (ABST) will help themselves.'

- (17) a. gí-gu'aλ=u sí-saḿʷλ / gu'aλ=u sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (MED) are helping each other.'

- b. gí-gu'aλ=i sí-saḿʷλ / gu'aλ=i sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (DIS) are helping each other'

- c. gí-gu'aλa-λ=gi sí-saḿʷλ / gu'aλa-λ=gi sí-saḿʷλ
 PRED.PL-help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 'They (ABST) will help each other.'

(16) と (17) の例では、上の三人称複数の例を見るだけでは、主語が複数の場合の再帰代名詞パターンを以下の規則でまとめられそうである：

表 3: 三人称複数のデータに基づいた再帰代名詞パターンのまとめ

I)	再帰代名詞パターンで再帰表現を表すためには、述語と再帰代名詞の片方だけで複数形を使う。
II)	再帰代名詞パターンで相互表現を表すためには、再帰代名詞の複数形である <i>sísaḵʷ</i> を使う必要がある。
III)	<i>sísaḵʷ</i> で相互表現を形成すれば、述語の方では複数形があってもなくても良い。
IV)	結果として、述語の方で複数形がなく、再帰代名詞が複数形である場合に、再帰表現と相互表現の両方の可能性があるため、曖昧性が生じる。

次に、一人称複数と二人称複数の場合にも表 3 のようにまとめられるかどうかを見ていこう。まずは、二人称複数の例を示す。

- | | | | | | |
|---------|-------------------------------|-----------------|----|-------------------------------|-----------------|
| (18) a. | <i>gí-gu'á</i> la=su | <i>sí-saḵʷ</i> | b. | <i>gu'á</i> la=su | <i>sí-saḵʷ</i> |
| | PRED.PL-help=2.SBJ | PRED.PL-PN.REFL | | help=2.SBJ | PRED.PL-PN.REFL |
| | 'You are helping yourselves.' | | | 'You are helping each other.' | |

(18a) の例を見て分かるように、二人称複数は、再帰表現で述語と再帰代名詞の両方の複数形を許すので、少なくとも再帰表現において三人称と異なる。それに対して、(18b) のデータは表 3 のまとめと矛盾していない。二人称複数のデータは三人称のデータほど体系的に集められなかったので、(18a) は相互表現として使えるかどうか、(18b) は再帰表現として使えるかどうか、再帰代名詞を使った (18a)・(18b) 以外の二人称複数の再帰・相互表現があるかどうかは不明である。

本稿の最後に付属参照資料として添付した人称接語の表で分かるように、ハイヌラ語において二人称と三人称は、人称接語において接語自体には単複の区別がないので、複数性は (普段述語の) 複数形を使うことにより表される。これに対して、一人称複数と一人称単数の人称接語は異なるので、一人称複数の場合に複数形の使用は任意的である。この事実は、再帰代名詞パターンの再帰・相互表現に反映されているかどうかをためてみるために、一人称複数の例を最後に紹介する。まずは、除外的一人称複数の例を以下に示す。

- | | | | | | |
|---------|------------------------------------|-------------|----|-------------------------------------|-----------------|
| (19) a. | <i>gu'á</i> la=nux ^w | <i>saḵʷ</i> | b. | <i>gu'á</i> lanux ^w | <i>sí-saḵʷ</i> |
| | help=1PL.EXCL.SBJ | PN.REFL | | help=1PL.EXCL.SBJ | PRED.PL-PN.REFL |
| | 'We (EXCL) are helping ourselves.' | | | 'We (EXCL) are helping each other.' | |

(19a) は、再帰表現なのに複数形が 1 つもないので、表 3 のまとめと矛盾しているが、一人称複数の場合に複数形が任意的であることで説明できそうである。また、(19b) は表 3 のま

とめと矛盾していない。ただ、(19a) は相互表現として使えるかどうか、(19b) は再帰表現として使えるかどうかは不明である。また、再帰代名詞を使った (19a)・(19b) 以外の一人称複数形の再帰・相互表現があるかどうか確認できていない。除外的一人称複数については、さらに次の再帰表現の例がある。

- (20) (dí-)dáka-λ-e=nux^w (sí-)saḫ^wλ
 (PRED.PL-)touch-FUT-EP=1PL.EXCL.SBJ (PRED.PL-)PN.REFL
 ‘We (EXCL) will touch ourselves.’

(20) の例では、単数形と複数形の全ての組み合わせが可能であり、どの組み合わせでも再帰表現となる。表 3 のまとめと矛盾している点は、述語と再帰代名詞の両方で複数形が現れ得ることと、両方で単数形が現れ得ることではあるが、後者はまた一人称複数の場合に複数形を必要がないことで説明できそうである。

次に、包括的一人称複数の例を以下に示す。

- (21) gu'áλa=nis sí-saḫ^wλ
 help=1PL.INCL.SBJ PRED.PL-PN.REFL
 ‘We (INCL) are helping ourselves.’ / ‘We (INCL) are helping each other.’

(21) の例は表 3 のまとめと矛盾していないが、単数形と複数形の他の組み合わせではどうなるかは確認できていない。

最後に、助動詞が使われている複述語の再帰代名詞パターンの例を示す。まず、主語が単数の例を示す。

- (22) kú=n gu'áλ(a) saḫ^wλ
 AUX.NEG=1SG.EXCL.SBJ help PN.REFL
 ‘I am not helping myself.’

- (23) kú=cu gu'áλ(a) saḫ^wλ
 AUX.NEG=2.SBJ help PN.REFL
 ‘You are not helping yourself.’

主語が複数のデータの中には、否定助動詞と勸奨法 (cohortative) 助動詞の例がある。まずは、否定助動詞の例を示す。

- (24) a. kú=cu gí-gu'áɬ sáx̄wɬ b. kú=cu gu'áɬ sí-sáx̄wɬ
 AUX.NEG=2.SBJ PRED.PL-help PN.REFL AUX.NEG=2.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
 'You are not helping yourselves.' 同左 / 'You are not helping each other.'

- (25) a. kú=nux^w gí-gu'áɬ sax̄wɬ / kú=nux^w gu'áɬ sí-sax̄wɬ
 AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ PRED.PL-help PN.REFL / AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
 'We (EXCL) are not helping ourselves.'

- b. kú=nux^w gu'áɬ sax̄wɬ / kú=nux^w gu'áɬ sí-sax̄wɬ
 AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PN.REFL / AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
 'We (EXCL) are not helping each other.'

否定助動詞のデータで表 3 のまとめと矛盾しているのは、(25b) の例である。これまでのデータの再帰代名詞パターンの相互表現の全ての例では、再帰代名詞の複数形が出ていたが、(25b) のデータは、単数形の再帰代名詞の相互表現も可能であることを示唆している。さらに、コンサルタントは (25) のデータに関して、再帰代名詞と本動詞の *gu'áɬ* の両方を複数形 (*gígu'áɬ*) にすれば、相互表現にならないと指摘し、これも表 3 のまとめと矛盾している。また、再帰代名詞と本動詞と両方が複数形にすると再帰表現として使えるかどうかは不明である。

最後に、勧奨法助動詞を示す。

- (26) wíse=nis dí-dak sí-sax̄wɬ
 AUX.COH-1PL.INCL.SBJ PRED.PL-touch PRED.PL-PN.REFL
 'Let's touch each other.'

(26) の勧奨助動詞の例は、表 3 のまとめと矛盾してはいないが、他の組み合わせができるかどうか、勧奨助動詞と再帰代名詞が共起した再帰表現があるかどうかは不明である。

4.3 パターンのまとめ

本節では、上に見たデータから言えることをまとめる。まずは、**人称繰り返しパターン**について言えそうなことは以下の通りである：

- 1) 先行研究で記述されている再帰代名詞の他に、人称繰り返しパターン (X_1 が X_1 を) によっても再帰表現を表すことができる。
- 2) 単述語・人称接語パターンと複述語・人称接語パターンと代名詞・人称接語パターンの 3 つのパターンがある。

再帰代名詞パターンについては、一旦三人称複数のデータに基づいて考えた表3のまとめは結局一人称と二人称の場合に適用されないことが分かった。前節で見てきた一人称複数と二人称複数のデータも含めると、それぞれの人称の複数において述語と再帰人称代名詞の単複のどの組み合わせで再帰と相互が表せるかを以下の表4のようにまとめられる。

表4：全人称複数のデータに基づいた再帰代名詞パターンのまとめ

除外的一人称複数		包括的一人称複数		二人称複数		三人称複数	
再帰	相互	再帰	相互	再帰	相互	再帰	相互
SG + SG				SG + PL			
SG + PL	SG + SG			PL + SG		SG + PL	SG + PL
PL + SG	SG + PL	SG + PL	PL + PL	PL + PL	SG + PL	PL + SG	PL + PL
PL + PL							

表4で見て取れるように、述語と再帰代名詞の複数形の組み合わせに関しては一般化を図るのがとても困難である。全体的に再帰代名詞パターンについては、次のことがまとめられそうである：

- 1) 主語が単数の場合に、再帰代名詞の単数形 (*sáx̄w̄λ*) が使われ、先行研究における記述から予想できるように、再帰表現となる。
- 2) 再帰代名詞の単数形 (*sáx̄w̄λ*) は、相互表現でも使える。
- 3) 再帰代名詞の複数形 (*sisax̄w̄λ*) は再帰表現と相互表現の両方を表すために使える。
- 4) 再帰代名詞は相互表現を表す場合に複数形 (*sisax̄w̄λ*) を使う強い傾向がある。

5 まとめ

前章の説明で分かるように、本稿で扱っているデータの再帰・相互表現の記述に関する主な問題点は本質的に、主語が複数である場合の再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現における単数形と複数形の組み合わせに関する問題であるとまとめられそうである。従って、再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現を体系的に記述するのが中々難しいことが最も大きな問題であるが、筆者が現時点で疑問点だと思う全ての点を具体的に以下にまとめる：

【人称繰り返しパターンによる再帰表現の記述の問題点・疑問点】

- 1) 人称繰り返しパターンによる相互表現はないのか？
- 2) (4)・(5) の例文のような一人称複数の再帰表現は本当に言い間違えではないのか？
- 3) 人称繰り返しパターンによる再帰表現はなぜコンサルタントBに言えないのか？

【再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現の記述の問題点・疑問点】

- 4) データが足りない。(全ての人称・数・組み合わせの例がほしい)
- 5) 再帰代名詞で相互表現を表したい場合に、複数形を使わないといけない強い傾向はどこまで強いのか？今のデータで反例が1つ (25b) しかないのは偶然なのか？
- 6) なぜ三人称複数の再帰・相互表現だけが一般化できそうなのか？
- 7) そもそも一般化ができるのであろうか？

さらに、以下の問題点・指摘が挙げられる：

- 8) データが足りない。全ての人称・数の例が集まっているのではないので、現段階の分析の信頼性が十分高くないと推定できる。また、再帰代名詞パターンのデータにおける述語と再帰代名詞の単数形と複数形の全ての組み合わせが集まっているのではない(従って、再帰表現と相互表現のどちらか或いは両方になり得るかどうか分からない組み合わせがある)。
- 9) 1つのパターンで再帰表現と相互表現の両方となりうる場合に、どちらになるのかが動詞による可能性があるので、より沢山の動詞の例及び再帰性・相互性の調査になるべく適している動詞の例があれば、より良い分析ができると期待できる。
- 10) 2.1節でも述べたように、相互性の種類や再帰・相互表現の多機能性・多義性を配慮して体系的に再帰・相互表現のデータを集めてきたわけではないので、これらについて分析することができない。
- 11) Nedjalkov (2007: 16-17) などによれば、相互性を表す自由形態素はめったに多義的ではないのに対して、相互性を表す接辞はよく多義的である。このような傾向があることは、ハイヌ語における再帰代名詞として記述されてきたものの、相互性も表せる *sax̃ʷ* が一次的には相互性を表す形態素ではなく、再帰代名詞であることを示唆していると言えよう。

6 今後の課題

今後の課題としては、本稿で紹介した再帰・相互表現の問題点の解決を試みるために、再帰・相互表現の多機能性と多義性を配慮した上で、再帰・相互表現のデータを増やし、ハイヌ語の再帰・相互表現について再考察したい。

また、筆者の調査で例がまだほとんど出ていない相互接尾辞の *-ap'* と再帰接尾辞の *-saq̃ʷ* の例もできるだけ集め、他の再帰・相互表現とどのような体系をなすかを調べていきたい。

略号一覧

-	形態素境界	INCL	包括的
=	接語境界	lit.	文字通り
1	一人称	MED	中称
2	二人称	NEG	否定
3	三人称	OBJ	目的語
ABST	欠称 (Absent)	PL	複数
AUX	助動詞	PN	代名詞
COH	勸奨法	PRED	部分重複
DIS	遠称	rec.	相互性
EP	挿入音	REFL	再帰
EXCL	除外的	SBJ	主語
FUT	未来	SG	単数

参考文献・資料

- Bach, Emmon (1990a) Stem Extensions in Haisla. *International Conference on Salish and Neighboring Languages* 25.1-16.
- (1990b) *A Haisla book*. Unpublished draft.
- (1995) A note on quantification and blankets in Haisla. In: Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer and Barbara H. Partee (eds.) *Quantification in Natural Languages* 13-20. Dordrecht: Kluwer.
- (2001a) Building words in Haisla. *University of Massachusetts Occasional Publications* 20: 51-73.
- (2001b) *English – Haisla Dictionary*. Unpublished draft.
- Dalrymple, Mary; Kanazawa, Makoto; Mchombo, Sam and Peters, Stanley (1994) What Do Reciprocals Mean? In: Mandy Harvey and Lynn Santelmann (eds.) *Proceedings of the Fourth Semantics and Linguistic Theory Conference: SALT IV* 61-78. Ithaca, N.Y.: Cornell University.
- König, Ekkehard & Gast, Volker (2008) Reciprocity and reflexivity – description, typology and theory. In: Ekkehard König & Volker Gast (eds.) *Reciprocal and Reflexives: Theoretical and Typological Explorations*, 1-32. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986a) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 1. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.
- (1986b) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 2. Canadian*

Ethnology Service Paper 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.

Nedjalkov, Vladimir P. (2007) Overview of the research: Definitions of terms, framework, and related issues. In: Vladimir P. Nedjalkov, Emma Š. Geniušienė & Zlatka Guentchéva (eds.) *Reciprocal Constructions Volume 1*, 3-114. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Raley, George (n.d.) *English – Kitamaat*. Unpublished draft from Archives of British Columbia: Raley Collection.

Vink, Hein (1977) A Haisla phonology. *International Conference on Salish Languages* 12: 111-131.

———— (1978) Root-expansion in Haisla. *International Conference on Salish Languages* 13: 1-10.

【付属資料】

【本稿の表記法】

子音音素 :

/p/:	⟨b⟩	/p ^h /:	⟨p⟩	/pʰ/:	⟨p̰⟩	/k/:	⟨g⟩	/k ^h /:	⟨k⟩	/kʰ/:	⟨k̰⟩	/ʔ/:	⟨ʔ⟩
/t/:	⟨d⟩	/t ^h /:	⟨t⟩	/tʰ/:	⟨t̰⟩	/k ^w /:	⟨g ^w ⟩	/k ^{wh} /:	⟨k ^w ⟩	/k ^{wʰ} /:	⟨k̰ ^w ⟩	/h/:	⟨h⟩
/ts̄/:	⟨z⟩	/ts̄ ^h /:	⟨c⟩	/ts̄ʰ/:	⟨c̰⟩	/q/:	⟨ḡ⟩	/q ^h /:	⟨q⟩	/qʰ/:	⟨q̰⟩	/s/:	⟨s⟩
/tʰ/:	⟨λ⟩	/tʰ̄/:	⟨λ̄⟩	/tʰ̄ʰ/:	⟨λ̰̄⟩	/q ^w /:	⟨ḡ ^w ⟩	/q ^{wh} /:	⟨q ^w ⟩	/q ^{wʰ} /:	⟨q̰ ^w ⟩	/ʈ/:	⟨ʈ⟩
/m/:	⟨m⟩	/mʰ/:	⟨m̰⟩	/w/:	⟨w⟩	/wʰ/:	⟨w̰⟩	/x/:	⟨x⟩	/χ/:	⟨x̄⟩	/l/:	⟨l⟩
/n/:	⟨n⟩	/nʰ/:	⟨n̰⟩	/j/:	⟨y⟩	/jʰ/:	⟨y̰⟩	/x ^w /:	⟨x ^w ⟩	/χ ^w /:	⟨x̄ ^w ⟩	/lʰ/:	⟨l̰⟩

※ 子音音素の主な異音変異 (allophonic variation) :

/p/:	[p ~ b]	/t/:	[t ~ d]	/k/:	[k ^j ~ g ^j]	/k ^w /:	[k ^w ~ g ^w]
/q/:	[q ~ c]	/q ^w /:	[q ^w ~ c ^w]	/ts̄/:	[ts̄ ~ dz̄]	/tʰ/:	[tʰ ~ dʰ]

母音音素 :

/i/:	⟨i⟩	/a/:	⟨a⟩	/u/:	⟨u⟩
------	-----	------	-----	------	-----

※ 母音音素の主な異音変異 (allophonic variation) :

/i/ → [e_i] / [+uvular/glottal] ____ /u/ → [ou] / [+uvular/glottal] ____

その他 :

⟨e⟩ = シュワー ⟨'⟩ = アクセント

【直接法における主語・直接目的語の人称接語】

主語の人称接語：

	単数	複数
一人称・除外的	=n / =nug ^w a	=nux ^w
一人称・包括的		=nis
二人称	=su	
三人称 - 近称	=ix	
三人称 - 中称	=u	
三人称 - 遠称	=i	
三人称 - 欠称	=gi	

※ 一人称単数の主語の人称接語は2つの異形態がある。助動詞に付くのは、=nのみであるが、それ以外の環境では自由変異の関係にある。

※ ハイスラ語には、/s/ + /s/ → /tsh/ という音韻規則があるので、二人称の主語人称接語である =su は場合によって前の ⟨s⟩ と合体し、=cu となることがある。例えば、=su が否定助動詞の *kus-* という異形態の後ろに付く時に、*kucu* (AUX.NEG.2) となる。

直接目的語の人称接語：

	単数	複数
一人称・除外的	=enλ(a)	=enλanux ^w
一人称・包括的		=enλanis
二人称	=uλ(a)	
三人称 - 近称	='ix / ='ex̄g	
三人称 - 中称	='u	
三人称 - 遠称	='i	
三人称 - 欠称	='ex̄gi	

※ 筆者のデータの中には、三人称・欠称複数の直接目的語の人称接語として、先行研究の記述でこれまでに見えていない -'i'ex̄gi という生産性が低い接語も見られるが、この接語の振る舞いに関する詳細は不明であるため、表の中に入れていない。

受理日 2019年4月16日